黒い雨はどのように記憶されたか

松尾　雅嗣
広島大学平和科学研究センター

はじめに

本稿は原爆投下時の黒い雨が被災者にどのように記憶されているかを証言にもとづいて明らかにすることを目的とする。

広島における原爆被災については、既に多くの資史料と研究が蓄積されているが、原爆被災の全体像については、いまだに多くの未知の問題が残されている。しかも、浜谷正晴に従い、「原爆体験」を、「あの日から現在まで、原爆に被爆した人びとの身に起こったすべてのことが包み込まれていなくてはならない．…」（浜谷 2005: v）ものと考えるならば、黒い雨の記憶もまた「被爆体験」を包摂する「原爆体験」のひとつとみなすべきものである。本稿はこの意味での「原爆体験」の一端を明らかにすることを試みるものである。

１　データと方法

本稿で用いたデータは、１９８５年日本被爆者団体協議会（被団協）が行った「原爆被害者調査」である。調査回答者は１３，１６８人である。本稿では、この調査の問４回答者のみを対象とした[1)]。この設問が、次の表４に示すように主として当日の状況を尋ねる自由記述式の設問だからである。

表４　１９８５年被団協調査　問４

問４　「あの日や、その直後のことで、いまでも忘れられないこと、恐ろしく思っていること、心のこりなこと、などがありますか。あるとすれば、どんなことですか。例を参考に、なるべく、その状況や、あなたの思いがわかるように書いてください」

◇例◇
ア　人びとの死んでいる姿や、生きていた人たちの苦しみのようす、死んでいった人びとの死にかた
イ　それを見て、あなたが感じたこと
ウ　水や助けをもとめる人びとに、なにもしてあげることができず、心のこりに思っていること、など

小規模の黒い雨は、長崎、特に西山地区でも記録されている（The Committee for the Compilation of Materials on Damage Caused by the Atomic Bombs in Hiroshima and Nagasaki 1981: 101, 広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会 1985: 81-82, ）が、本稿では、広島でより大規模であったことに鑑み、問４回答８２８１件のうち、対象をさらに広島で被爆したと回答したもの（所謂直爆、入市、救護、特例地域と回答したもの）５５６５件に限定した。このうち、黒い雨への言及のあるものは、２３６件[2)]、対象全体の約４．２５％である。このうち、１６件は、証言者本人の体験ではなく、明らかに伝聞であるが、記憶という観点から、この１６件も本稿での検討の対象に含めた。

われわれが対象とするのは、上掲の問４「あの日や、その直後のことで、いまでも忘れられないこと、恐ろしく思っていること、心のこりなこと、などがありますか。あるとすれば、どんなことですか…」という設問に対する回答であるから、このことは約５％弱あるいは２０人に１人の被爆体験者にとって黒い雨は、「いまでも忘れられない」こと、「恐ろしく思っている」ことのひとつであると言えよう。５％弱という比率を大きいと見るか、小さいと見るか筆者には判断しかねるが、「黒い雨」が原爆投下時の記憶の中で無視しえない一要素であることは否定できまい。

黒い雨に言及した被爆者のプロフィールは以下の通りである。表１～３に見るように、性別については、若干女性に偏り、被爆時年齢は約４分の３が１５才から３９才までである。このような性別、被爆時の年齢、被爆状況などが黒い雨の記憶の内容と態様にどのような影響を及ぼすかは詳らかにしない。今後の検討課題である。

表１　性別

	人	%
男	102	43.2
女	128	54.2
無回答	6	2.6
合計	236	

表２　被爆時年齢

被爆時年齢	人	%
4 才以下	5	2.1
5-9 才	17	7.2
10-14 才	20	8.5
15-19 才	56	23.7
20-24 才	58	24.5
25-29 才	25	10.6
30-39 才	39	16.5
40 才以上	13	5.5
無回答	3	1.3
合計	236	

表３　被爆状況

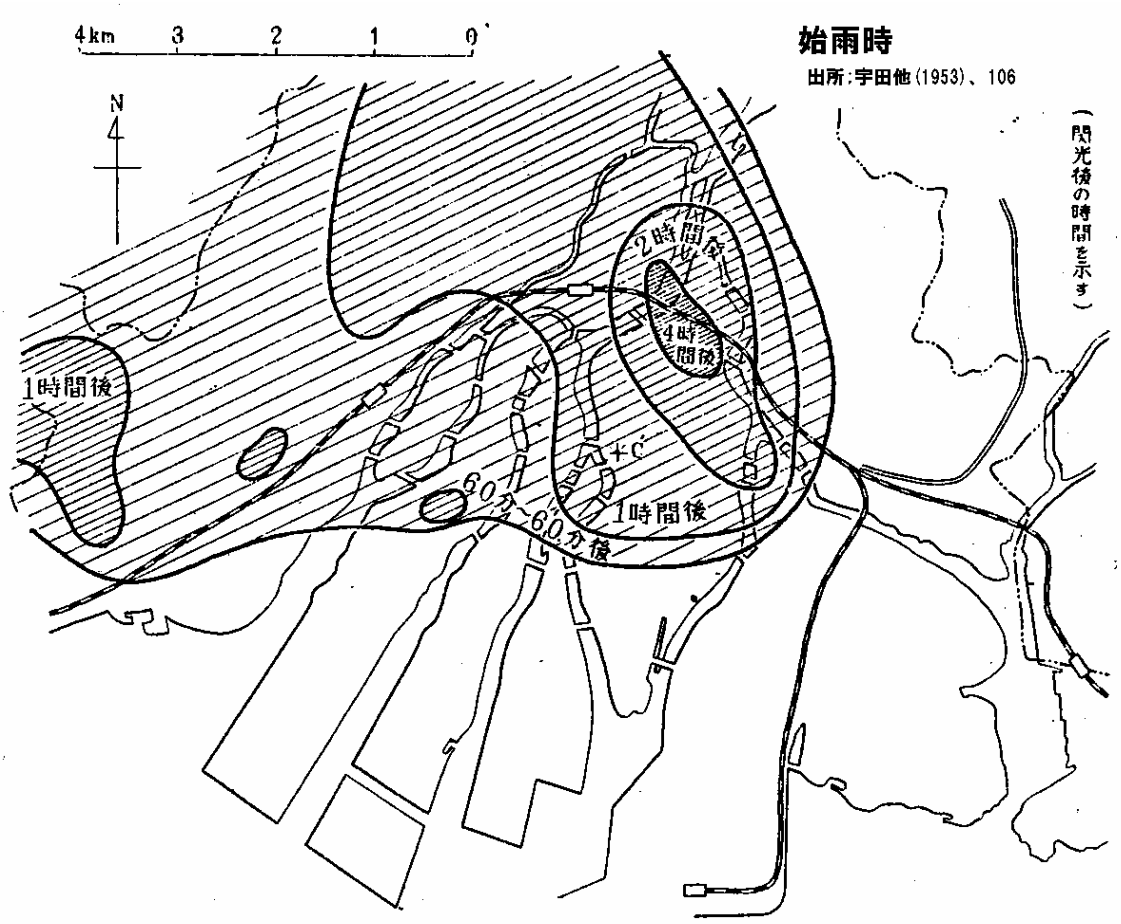
		人	%
直爆	0.5	1	0.4
	0.5 – 1.0	29	12.3
	1.0 – 1.5	38	16.1
	1.5 – 2.0	60	25.4
	2.0 – 3.0	65	27.6
救護		5	2.1
特例地域		19	8.1
入市		19	8.1
合計		236	

本稿では、黒い雨への言及のある上記２３６件を対象に、被爆者が黒い雨のどのような特質を記憶しているか、黒い雨に遭遇してどのような体験や印象が記憶に残っているかを明らかにする。以下、宇田ほか（1953）の記述に準じて、黒い雨の降雨状況（遭遇時刻）、黒い雨遭遇地域、黒い雨の性情、旋風、気温低下などの随伴現象、それ以外の被災者の体験に分けて被災者がどのような事柄を記憶しているかを検討する。

１　始雨時と終雨時

宇田ほかに拠れば黒い雨は２０分ないし１時間後に降り始めた場合が多いが、次の地図に示すように地域により１～３時間の違いがある。白島辺りの降り始めが遅いのは、他の降雨が爆発によるものであるのに対し、爆発後の火災に起因するものとされる（宇田ほか 1953: 106-107）。

地図１　黒い雨降り始時刻（爆発後経過時間）



被爆者の記憶はどうであろうか。原爆爆発後の生き地獄とも回想される未曾有の被災のなかで、多くの被災者にとって黒い雨がいつ降り始めたかはさしたる重要時であったとも思われない。それゆえ、正確な時刻や投下後の経過時間についての認識も記憶も漠然としたものならざるを得まい。表４に示すようにこの点について何らかの言及がある証言は、当然とはいえ、全体の３分の１弱（７８件）にすぎない。残りの３分の２（１５８件）にはまったく言及がない。言及のあるものも、「(投下）直後」、「そのうち」、「避難中」[3)]、「どれくらい経ったか分からない」（13-17027、以下引用に続く数字は調査データの参照番号を示す）といった表現が圧倒的に多くなる。全体の約４分の１（５９件）の証言で、黒い雨は、具体的な時間の経過を明示することなく、個々の被爆者にとって有意味な、原爆爆発後のからの出来事の時系列上の連鎖の中にのみ位置づけ

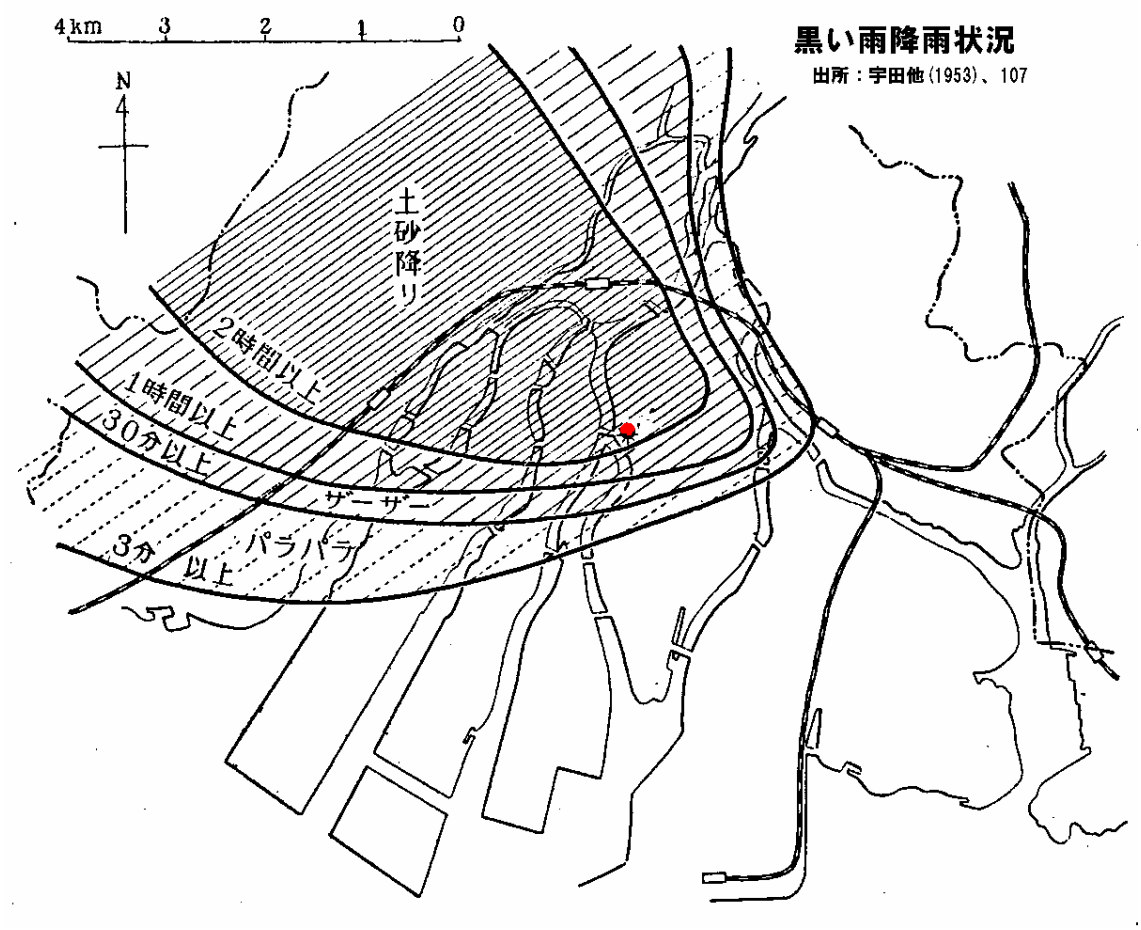
られるのである。表４は、残りの１９件のうち、わずか１７件が降り始めの時刻か爆発後の経過時間を具体的に記述していることを示す。

表４　黒い雨の降り始め

	人	%
言及なし	158	67.0
そのうち	21	8.9
直後	16	6.8
避難中	16	6.8
経過時間不明	6	2.5
火災とともに	1	以下略
１０分後	1	
２０～３０分後	1	
３０分後	1	
９時頃	1	
１時間後	1	
２時間後	1	
数時間後	3	
昼過ぎ	1	
午後１時頃	1	
午後３時頃	2	
午後４時頃	1	
午後５時頃	1	
午後５時～６時頃	1	
夕方	1	
当日	1	

黒い雨は、地域によっては２時間以上降り続いた。次の地図２は降雨継続時間を示すが、これは止んだ時刻とほぼ対応する。しかし、大多数の被災者にとって、黒い雨がどの程度降り続いたか、いつ止んだかは、ほとんど関心事にならなかったようである。理由は、降り始めの場合とおそらく同じであろう。黒い雨の継続時間、止んだ時刻についての言及はほとんどない。言及のある証言は、全体の２～３％に過ぎない。「２０分くらい」、「約２時間」、「９時から午後３時過ぎまで」といった表現、「雨が止んだ」という表現が散見されるだけである。大多数の被災者にとっては、「どれ程経ったのか判らない」（13-32039）というのが実感だったのではなかろうか。

地図２　降雨状況



２　どこで黒い雨にあったか

黒い雨の降った地域は、前掲の地図１,２から容易に判断されるように爆心から北西に偏っている。従って、市の「中心部」（爆心、本川、元安川、相生橋、土橋などを含む）や白島・牛田など爆心に近い地域を別とすれば、言及される地点は、当然のことながら市の「西部」、「己斐」、「三滝」、「三篠・大芝」、「横川」など市の北西部に偏っている。勿論、「裏山」など場所の確定できないものある。

次表５のデータは、記述をある程度グループ化したものであり、証言中の実際の記述はより詳細でかつ多岐に渡る。例えば、「己斐」というグループに含めた表現には、「己斐駅（のあたり、の近く)」、「己斐橋」、「己斐の山」などが含まれる。

表５　黒い雨に遭った場所

場所	件数	%
言及なし	115	49.6
己斐	25	10.8
白島・牛田	11	4.7
中心部	10	4.3
三滝	9	3.9
広島駅	5	2.2
三篠・大芝	5	2.2
福島	5	2.2
中広・広瀬	4	1.7
横川	4	1.7
市西部	4	1.7
裏山	3	1.3
舟入・観音	3	1.3
市内	2	0.9
芸備線方面	2	0.9
東練兵場	2	0.9
山手	2	0.9
江波山	2	0.9
以下略		

黒い雨の開始時刻、継続時間、終了時刻が被災者の記憶に強く刻み込まれていないのに対して、黒い雨に遭った場所は、これと対照的に強い印象を与えたようである。このことは、降雨の開始、継続、終了の時刻や時間に言及した証言が全体に１割程度であるのに対し、上の表５に示すように、何らかの形で黒い雨に遭遇した場所に言及する証言が全体の半数を超えることからも裏付けられよう。

別の言い方をすれば、黒い雨は、被災者の記憶の中で、時刻と時間にではなく、場所に、より密接に結び付けられていると言ってよかろう。原爆爆発後の被災者の行動は、まず避難と救出、救援、場合によっては捜索であった。避難は、松尾・谷が明らかにしたごとく、市内の川や橋を渡るという場所の移動にならざるを得ない（松尾・谷 2007, 同 2008）。救出、救援、救護も爆心近くでは火災のため同一場所にとどまることを断念し、場所を移動せざるを得なかった。原爆投下後の行動が場所の移動であることから、被災者の体験は時間とで

はなく、場所とより密接に結びつくことになったのではなかろうか。仮に、大多数の被災者が原爆後一箇所に留まり続けていたとしたら、被災者の体験は時刻と経過時間とにより密接に結びついていたのではなかろうか。先に述べたように、個々の被爆者にとって有意味な原爆爆発後の体験と出来事の連鎖は、時間とではなく空間と結び付けられていると言えようか。これは、今のところ作業仮説に過ぎないが、今後の検討課題として提起しておく。

３　黒い雨の性状

黒い雨の性情については、その色（黒)、泥分の多かったこと、油と誤解されたほど粘り気の強かったこと、大粒で激しかったこと、被災者には知る由もなかったが放射性降下物が多量に含まれていたことが指摘されている。しかも、すべての降雨域ではないにせよ急激な気温の低下、雷鳴、旋風を伴った（宇田ほか 1953:103, 108-110)。加えて、相当数の被災者の体験では、火災の炎のさなかに降った雨である[4)]。

３．１　色

次表に見るように、証言の３分の２以上が雨の黒色に言及している。

表６　雨の色

黒い*	161
黒か茶色	1
灰色	1
言及なし	73

＊　「真っ黒」、「墨汁」「黒ずんだ」などを含む

本稿で使用したデータのもとになった調査が行われた１９８５年には、「黒い雨」という表現が既に慣用として定着していたことを考慮すれば、雨の黒さが記憶に残っているというより、単に慣用句として使用された可能性も考慮しなければならない。「黒い雨」という表現を用いた証言は表６の１６１件中１４４件あり、残りの１７件は他の慣用以外の表現で黒色に元言及している。１４４件の「黒い雨」の用例のうちどの程度が色を明確に意識して使用されたものか

については、判断の材料がない。ここでは、慣用以外の黒をさす表現と他の色の言及を合わせた１９件が存在することを指摘するにとどめる。

３．２　その他の特質

証言における黒い雨に性状に関する多様な表現を、宇田ほか（1953）の指摘に従ってコード化し、言及数を総括したのが次の表７である。

表７　黒い雨の性状

		件数	%
特性	豪雨	71	30.1
	驟雨・俄か雨	29	12.3
	暗転	25	10.6
	放射能	18	7.6
	油性、粘性	18	7.6
	泥、塵芥など	10	4.2
	気温低下	9	3.8
随伴現象	火災	29	12.3
	爆風旋風	15	6.4
	雷鳴	7	3.0

黒い雨が激しい豪雨であったことに言及した証言が最も多い。その様子は次のような証言から窺うことができる。

･･･硯を洗ったような黒雨がバケツでうつすかのように多量に降り、地面が海のようになった･･･（12-0153）（以下、強調はすべて筆者）

･･･大つぶの雨が降り、いたくてたまらず人々が逃げまどった･･･（27-0316）

･･･被爆後猛烈な勢いで降った黒い雨のあとで、この道に沿って側溝があって、その側溝から音をたててあふれていた水･･･（34-0802）

･･･何時頃だったか記憶がないが、真黒い雨が急に降り出して来て、大夕立のような勢いで降り、見る見るうちに小川の水量が増えた。･･･（34-5862）

当日己斐中町に住んでいました。･･･直後黒い雨が多量に降って、川に家財が沢山流れるのを見ました。･･･（34-6165）

これに次いで多いのが、突如として空が曇り、夕立のように突然降り始めたことへの言及である。それぞれ１割程度の証言がこれに言及している。塵芥、

泥、油などを含むことへの言及もある。油については、米軍が油をまいたと言う風評も流れたようである。

･･･黒い雨が降り、アメリカが又油をまいたなど聞いた･･･（34-0107）

･･･そのうちに油を流すような真黒い雨が降りだした。人のデマはとぶ、アメリカ軍は空から油を流して火をつけるそうな･･･（34-0551）

放射能への言及も少なくないが、次の証言に見られるように、後日それを知ることになる。

･･･放射能を多量に含んだ雨とは露知らずむさぼり飲んだ。･･･（15-0002）

･･･放射能の雨とは後ほど知りました。･･･（32-0234）

･･･黒い雨が原爆と関係あるとわかったのは１０年以上してからだったと思う･･･（34-5867）

･･･遊んでいたら黒い雨が降りだしたので、みんな家に帰りました。･･･その黒い雨が毒の雨だったとは知りませんでした。（34-6078）

とはいえ、顧みれば黒い雨にあったことが疾患の原因となったという理解は８件の証言に見られる。以下のその例の一部である。

･･･黒い雨にぬれ、数日間普通の作業して居て、急に皮膚に赤い斑点が出来、１週間ぐらいで死んだ･･･（22-0383）

・・・直後に降った黒い雨水を飲んだため胸の中より焼け、毎日胸がやける、熱いと言い乍ら氷ばかり食べ、苦しみ乍ら８月１５日玉音の直後息を引きとりました。（28-0271）

･･･それが将来内蔵を欠陥させる原因の、黒い雨とは知るすべもなくほてった躯を雨に濡し、水たまりに口をつけた。･･･（33-0161）

･･･黒い雨を頭からかぶり、被爆後１Ｗぐらい高熱、嘔吐があった。（34-6227）

次のような特異な証言もあるので、ここに紹介しておく。因みに、当日の事かどうか定かでないが、鯉など淡水魚、水田の害虫がいなくなったという報告もある（宇田ほか 1953: 109）。

･･･雨の中に出ると、母に、この雨には、毒があるから出たらいけないと大変しか

られました。　とんぼや、いなごが沢山死んでいるのを見せてくれて、人間だってこんなに死んでしまうから、雨にあたってはいけないと言っていた･･･（34-5651）

爆風、旋風そして火災と黒い雨の間には、明らかな因果関係、従って時間的な前後関係がある。黒い雨は、原爆爆発の爆風と火災による上昇気流の結果である。火災はまた局地的な旋風も引き起こした（宇田ほか 1953: 103, 107）。とはいえ、これらの現象は被災者にとっては時間をおかず連続的に発生した現象と理解されたようである。黒い雨に関して被災者の記憶に残るものとしては、表７に示したように「火災」と「旋風･爆風」が主なものである。激しい雨と火炎との対比が記憶に焼きついたのであろうか。

３．３　雨宿り

黒い雨の性状についての言及を概観したので、以下、黒い雨に逢った被災者がどのような体験をし、どのように行動し、どのように感じたかを手短に検討しておく。黒い雨に遭遇したとき、濡れるに任せるのではなく、何らかの形で雨を防いだ被災者も少なくない。雨を凌ぐ方法に言及した証言は、表８に示すように全体の２割に達しないが、証言として記述しないまでも実際に雨を凌ぐことを試みたり、なんらの方法で雨を凌いだ被災者はこれよりは多かったはずである。

表８　雨を防ぐ方法

	件数
防空壕	6
橋・鉄橋	6
家屋･軒下	4
トタン板･鉄板	4
布団･毛布	4
不詳	3
雨戸	1
かさ	1
船	1
葉	1
手段なし	1
言及なし	204

雨宿りの場所として多いのは、防空壕、橋や鉄橋の下、家屋の内部や軒下などである。トタン板や鉄板を利用した者、布団、毛布をかぶった者もいた。

３．４　その他の体験

黒い雨に濡れ、あるいは黒い雨を避けながら、被災者はどのように行動し、どのように感じたのであろうか。「豪雨」と「悪影響」については既に検討したので、これを除いて検討する。「豪雨」を「悪影響」、そして黒い雨の性情に関する上述の記述を除いて、黒い雨に遭ったときの体験や印象を記した証言は表９に示すように約７０件ある。

表９　その他の体験

体験等	件数
身体･着衣の汚れ	17
ずぶぬれ	7
雨水を飲む	10
雨が痛い	3
体を冷やす	3
意識回復	3
失神	2
恐怖･不安	10
その他	15

内訳	件数
身体の汚れ	6
着衣の汚れ	9
その他（床、川の水）	2

恐怖	5
不気味	3
地獄	2

これらの証言の中で特に多いのが、黒い雨による体と着衣の汚れ、雨水を飲んだこと、恐怖、不安を感じたことの記述である。体と着衣の黒い汚れについては、次のような証言がある。

･･･黒い雨を油だといった人もいたし、顔が真黒になった。･･･（34-5867）

･･･空が暗くなり雨が降った→体が黒くなった。→大火災がおき、松が燃えはじめた。川には人間が浮き沈みして流れている。（34-4154）

･･･シャツが黒汁をかけられたように皆よごれている。聞くと黒い雨が降ったという･･･（22-0042）

･･･突然「黒い雨」の大夕立になり、上着のない私のシャツも黒くなるので止む迄軒下で待機していたら、･･･（34-3628）

･･･被爆し、その後黒い雨にうたれ、白衣がまっ黒の水玉になった事･･･（34-5022）

･･･（家の）庭に造っていた防空ごうに入れ、あれこれしていた頃黒い雨が降った。主人の白いシャツがみるみる黒くなったのでおぼえている。･･･（34-5360）

証言から推察すると、白い着衣が黒くなったことがとりわけ印象に残ったようである。

既に述べたように雨宿りして黒い雨を避けることのできた被災者もあった。他方で、表９に示すように、ずぶ濡れになった者もある。黒い雨に濡れたときの対応と印象は人により異なる。火炎に追われ、また火傷のせいで、渇きを癒すため黒い雨を口にした被災者も、見聞も含まれるが、少なくはない。また、雨水を飲もうとして、あるいはその直後に命尽きた被災者もある。これらのことは次の証言が示すとおりである。

･･･水があってものむことも出来ず、･･･その時空が真っ黒になって大つぶの雨が降り出したのです。恐ろしい放射能の雨とも知らず、天の助けとばかり、せめて雨でも飲んでと一生懸命口をあけましたが、身体がぬれるばかりで口の中には入りませんでした。･･･（27-0523）

･･･のどがかわき、黒い雨の水たまりの水をたくさんのみました。･･･（34-5864）

･･･のどがかわいて、黒い雨が降ったはっぱにたまったつゆでのどをうるおしたこと等。（34-7146）

･･･水、水、とのどがかわいて、私は一生懸命さけんでいました。そこへ雨の黒い石油の様〔な〕においのする大つぶが降って来ましたが、毛布をかけていたその毛布にしみた雨を一生懸命すっていた思い出があります。･･･（14-0109）

･･･焼けただれた身体で、にわか雨の降った水たまりの水をナメながら見ておられたのでした。末期の水だったことでしょう。（34-1551）

･･･被爆後猛烈な勢いで降った黒い雨のあとで、この道に沿って側溝があって、その側溝から音をたててあふれていた水を呑むために屈んで水を呑むとモウこの被災者達はそのまま死んで仕舞うのであった。･･･（34-0802）

･･･被爆後すぐ太田川の堤につくった防空ごうに避難していた・・・（女学生）それから雨がふって防空ごうの中に流れこんできたその水をのんで死ぼうした。･･･（34-5616）

･･･そこへ沛然とした豪雨、それが将来内蔵を欠陥させる原因の、黒い雨とは知るすべもなくほてった躯を雨に濡し、水たまりに口をつけた。･･･（33-0161）

激しく降る黒い雨は、上の証言に窺われるように、渇きを癒すことができると同時に、命を失う誘惑でもあったという意味で、少なくともその瞬間には、二面性をもっていたと言えよう。表９に見られるように、一方で、恐怖･不安を感じ、痛みを感じ、失神する被災者がある。証言に現われた限りでは、多くがこのような体験である。その一端を以下に示す。

<恐怖･不安>

･･･無我夢中で己斐の山の中に向ってにげていました。その途中泥雨が降ってきて、とても恐怖でした。･･･（34-5119）

･･･周りが真暗くなり、雲がたれ下がり氷のような大雨が降り、暗黒の水がつなみのように上から小川に流れて来て、地球が暗やみになるのではないかと恐怖をわすれることの出来ないことです。（34-6296）

黒い雨が降ってきたのが不気味だった。･･･（34-6207）

一面見わたす限り暗雲ただよい不気味なる空気に見まわれた。風雨となり兵舎にて待機している時、･･･（28-0177）

横川駅の手前で黒い雨が降って来たのには益々恐ろしさが増し、ひたすら豪雨の中を突進しました。（11-0041）

･･･直後空が暗く黒い雨が降り出した時はこの世の終りかと思われた。（7-0319）

<雨に打たれ傷が痛む＞

･･･今にも焼け落ちそうな橋の上で、･･･世話のしようもなくて、焼けた皮膚を黒い雨に打たれ、痛がっている小さい子供たちを、私の身体でかばってやる位しか出来ませんでした。（34-5133）

･･･黒い雨が降って来た。防火用水のかげに腹部より多量の出血を流していた女の人が、雨が当って傷が痛むと言った。･･･（13-11026）

･･･黒い大つぶの雨が降り、いたくてたまらず人々が逃げまどった。（27-0316）

＜失神>

･･･大へん強い雨が降り、死んでしまうようで気が遠くなっていました。･･･（46-0056）

あの日は、私は直爆を受け上半身大やけどで、死人の山をかき分けて、私自身水を求め、助けを求め、黒い大雨にうたれて正気をなくして夕方迄地面に倒れておりました。･･･（34-0472）

しかし他方には、より少数であるが、火照った体を冷やしたり、意識を回復した被災者がいたことも否定できない。その瞬間には「干天の慈雨」と感じた者もいたことであろう。

･･･火傷のため身体中が熱い、やがて雨が降る。この雨はほどよく身体を冷やす。まさに慈雨だと思った。･･･（13-10015）

･･･途中東練兵場出口あたりで雨に会いました。･･･ちりやゴミの混ざった雨が降った。でも一時気持がよかった。火の中を潜ぐり、夏の炎天に半裸体のもので死ぬる思いでしたから、･･･（32-0234）

･･･しばらくして、どのぐらいか分りませんが、眞黒い雨が降って、気がついたのをおぼえています。･･･（27-0252）

兄嫁、･･･気をうしなっていると（兵隊がきて）しんだものと思ったのかムシロがかけられていた。雨がふって目がさめた。たすけてと叫んだら、気づく人があってひなん所につれていってくれた。･･･（01-2020）

その後どのくらいかわからないが、雨にあたり気がついた。（13-17027）

幼いとき特例地域で黒い雨に遭遇した者のうちには、「黒い雨が降ったのがめずらしくて、黒い雨の中を走り回って遊んだ事が記憶にあります」（34-6239）などの証言もある。

これらの証言から窺われるように、顧みればともかく、少なくとも黒い雨に逢った瞬間には、黒い雨がふたつの面をもっていたことも否定できない。

本稿でデータとして用いた証言が必ずしも大きな偏りをもつつものではない証左として、広島市原爆体験記刊行委員会（編）『原爆体験記』（以下、「原爆体験記」と略称）から本稿で例示した黒い雨にまつわるさまざまな記述と同様な記述の例を、如何に幾つか引用しておく。

そのうちにポツリポツリと大粒の雨が落ち始めて、次第に烈しくなり、ついにドシャ降りになった。一同われがちに雨宿りの場所を求めてそれぞれに身をかくした。しかしほとんど皆がズブ濡れになってしまった。雨が止んだ頃には、寒さのためにふるえだして歯の根も合わない。（原爆体験記 27）

ちょうどこの頃、西北の山の頂から、真黒い入道雲が、ぐんぐんと拡がって来た。何か無気味な空気があたりを支配した。やがて小石位もあるかと思われる大粒の雨が落ち始めた。生徒等は三人、五人と組合せになって、いま敷いてもらった板やこもで雨を防いだ。･･･K先生が、ずぶぬれになって、土砂降りの雨の中を自転車を押して連絡に来た。･･･一方、雨に濡れた生徒達は、しきりに寒さを訴えはじめた。破壊された橋の下で雨をさけた私達さえも、頭から足の先までぐっしょり濡れていた。服を脱いでしぼると、どす黒い汁が流れ落ちた。（同上

111-112）

すると急にまっ黒な雨が降りだしてすぐやんだ。（同上 121）

すっかりはれていた雲が急に黒雲に変ったかと思うと、大雨がざあざあとふりだした。（同上 141）

周囲は見渡すかぎり火の海である。黒煙は濛々として空を蔽い･･･燃え＜さか＞る火勢の音もすさまじく、･･･このときたちまち暗黒の空より雨を催した。（同上 168）

俄の降雨は白昼を闇黒に化して物凄いことであった。（同上 171）

結び

黒い雨にあった人々がどのように行動し、どのように感じたかについては、その全体像を明らかにする試みは寡聞にして未だ成されていないようである。被爆という体験の全体像から見ればごく一部に過ぎないとしても、黒い雨を経験した被災者の行動、認識、知覚という問題も被爆体験の明らかにされていない一面であろう。それを、迂遠な方法ではあるが、証言や手記、あるいは被爆者の描いた絵などから再構成することが本稿の最終目的である。依拠した証言も限られており、本稿で明らかにしたのはそのごく一部に過ぎない。証言、手記あるいは絵などのデータを蓄積し、黒い雨に遭遇した人々の行動と認識に接近することが今後の課題である。

謝辞

この研究には、平成２０年度～２２年度日本学術振興会科学研究費補助金「原爆文学関連自筆資料の目録作成と電子画像化の研究」（基盤研究　一般（C）、課題番号２０５２０５８４、研究代表者　松尾雅嗣）及び平成２０年度～２１年度広島大学地域貢献発展研究「原爆被ばく収集･整理・目録作成･電子画像化の研究及び広島市平和行政に関するオーラル・ヒストリー」（研究代表者　川野徳幸）の援助を受けた。

註

１　浜谷（2005）によれば、このうち問４に回答のあったものは、８２８１件であり、同書ではこれに他の条件を加えて６７４４件を分析対象としている。（浜谷 2005：xvi, xviii、14）。

２　黒い雨への言及という観点からすれば正確には２３８件ある。しかし、「黒い雨はなかった」、「黒い雨には遭わなかった」とする２件は分析対象から除いた。

３　「…へ逃げる途中」、「…で休んでいる時」などの表現はすべてこのカテゴリーに含

めた。

４　都市の焼夷爆撃による火災とそれに伴って発生した驟雨現象は、大阪、福岡、福山など各所で起こっている（宇田ほか 1953: 105）。

引用文献

宇田道隆ほか(1953) 「気象関係の広島原子爆弾被害調査報告」、日本学術会議原子爆弾災害調査報告書刊行委員会（編）『原子爆弾際学調査報告集』第一分冊、東京:日本学術振興会、98-119

浜谷正晴（2005）『原爆体験』、岩波書店

広島市原爆体験記刊行委員会（編）（1975）『原爆体験記』、東京；朝日新聞社

広島市･長崎市原爆災害誌編集委員会（編）(1985)、原爆災害：ヒロシマ・ナガサキ、東京：岩波書店

松尾雅嗣・谷整二（2007）「広島原爆投下時の一次避難場所としての川と橋」、広島平和科学 29, 1-25

松尾雅嗣・谷整二（2008）,「広島原爆投下時の避難：川と橋を越えて」、広島平和科学 30, 1-25

The Committee for the Compilation of Materials on Damage Caused by the Atomic Bombs in Hiroshima and Nagasaki (1981), *Hiroshima and Nagasaki: The Physical, Medical, and Social Effects of the Atomic Bombings*, Tokyo: Iwanami Shoten